

【用語】 吉川栄左衛門―幕府代官 貯穀―飢饉などに備えて穀物を貯えること 出穀―たくわえた穀物を出すこと 入会―山林などで株・薪などを共同で採取すること

【解説】 郷藏とは、村々に設置された穀物倉庫であり、江戸時代に年貢米の保管倉庫として建てられたのが始まりである。しかし、江戸中期以降から備荒政策が幕政の一つの柱として重視されるようになる。農民から供出された穀物が備蓄され、災害時の救済用として貸し付けられるようになった。しかし、郷藏は村役人の私有であることが多かったため、貯蔵穀物の不正な使用がみられたのである。このため幕府は、寛政元年（一七八九）正月、幕府領の村々へ村負担による郷藏の建設を命じた。

この文書は、寛政五年二月に発足した岩鼻陣屋の支配下にあった山田郡桐原村（大間々町）において、郷藏を建造する際の議定書である。

これによると代官が吉川栄左衛門の時、郷藏建設費用として年々上納していたが、代官が交替となったのを機会に積立金が返却されたので、それを金右衛門が預かっていた。しかし、郷藏建設費用に満たなかったため、桐原村はそれを見合わせていた。ところが年々供出する穀物などが増加し、郷藏がなくては収容しきれなくなったので建設を決意した。そこで村中が話し合った結果、入会地の手振山の立木や葛の根などを売り払い、その代金を積立金に加えて建築費を拠出することにしたのである。なお、この郷藏は大間々町桐原の世音寺地内に現存し、古文書とともに群馬県の指定史跡となっている。